差別禁止法を求めて
時代の正体

良心示す1票を

記者の視点
川崎支局編集委員 石橋 学

かすれかけの声を最後は叫ぶように響かせた。

「最後は人間の良心が勝つ。最後は人間の良心が勝つ。私はそう信じる。差別も戦争もない平和な世の中を実現しよう。腐った世の中をみんなの力で掃除しよう。腐った世の中を掃除しよう」

川崎市長選に立候補した関口実さんは演説をそう締めくくる。同じフレーズを2度繰り返すのは「一度では弱い気がする」からだという。

「67歳の清掃員です。発達障害です。ASD、自閉スペクトラム症です。ほかの発達障害や精神障害の人、マイノリティーや民衆に少しでも勇気を与えることになれば幸いです」

何種類も用意した演説文を読み上げていく。背中を丸め、うつむいたままなのはいじめられた経験が影響しているのか、障害によるものだと関口さんは考える。

周囲に運動員や支援者はいない。ちらしもポスターも作っていない。候補者と気付かずに通り過ぎる人も少なくない。選挙では聞き慣れないフレーズにけげんな顔を向ける人もいる。

私はしかし、その一言一言に拍手を送らずにいられなかった。

「イスラエルによるパレスチナ人の大量の虐殺、ロシアによるウクライナ侵略、ミャンマーの軍事政権による民衆の殺戮、沖縄で繰り返される米兵による女性への性暴力、これらは川崎にとって人ごとなのか」

「在日の女性に防刃チョッキを着させる日本社会とは何なのか。これらを人ごととするのは人間としてどうなのか」

「市長になったら関東大震災で虐殺された朝鮮人、中国人のために追悼碑を造るか、追悼式に自ら参加させていただきたい」

「朝鮮学校への支援も進めたい。子どもには何も罪がない。政治が気に入らないからといって子どもに罪をかぶせるのは、戦争中の米国が日本人を収容所に入れたのとどこが違うのか」

いままさに連なるべき声があった。

「人間は平等だ。国籍、性別、障害の有無、セクシュアルマイノリティーかそうでないかに関係なく、誰もが幸せに生きることができる川崎をみんなの力でつくっていきたい」

気付けば女性が一人うなずきながらノートにペンを走らせていた。

■共感

「腐った世の中」への危機感は広がっているようだった。

武蔵小杉駅前に演説を聞きに来た女性は自身も発達障害だった。

「障害を公表しながら参政権を存分に行使して、心の底から訴える姿に胸を打たれた。参院選の前からさまざまな政党が排外主義を競い合い、市井の人たちがヘイトを口にしていいという空気が広がっている。怖い」

市民運動の現場で関口さんと知り合って20年という茅ケ崎市の松本和史さん(53)は、そばに立つことで応援になればと東急線宮前平駅前に駆け付けた。

「もともと集会などでストレートな物言いをする人だったが、言うべきことを社会にぶつける大切さを改めて教えてもらった」

JR川崎駅前では聴衆の輪ができた。レイシストがヘイト街宣に現れるのを監視する市民たちだった。

「実は私、在日朝鮮人なんです」

共感と応援、そして感謝の思いからそう打ち明ける姿もあった。

危機はまさに目の前に広がっていた。同じ川崎市長選にレイシストの宮部龍彦氏(46)が立候補していた。「部落差別はもはや存在せず、被害を訴えるのは利権のためだ」というデマで被差別部落出身者を執拗に攻撃する差別主義者である。全国5360もの部落の地名リストの出版を企て、インターネットで公開した。被差別部落出身者250人余に訴えられ、550万円の損害賠償を命じられた。その後も学術研究と称して部落へ押しかけては街並みや家々を動画で撮影し、有料サイトでさらす。

差別で金もうけをするレイシストが選挙で訴える「政策」とは差別に他ならなかった。差別をなくすための公的施設の「中立化」も、在日コリアン集住地区の「改良」も、表現の自由を守るためという「ヘイトスピーチ罰則条例の廃止」も、さも正しいことのように装いながら、その施設、その地名、その民族を連呼して「正さねばならない存在」「叩いてもいい対象」とさらすためのものであった。自らは手を汚さず、同調する差別者に攻撃を仕向ける「犬笛型ヘイト」と呼ばれる、もっとも卑劣なヘイトスピーチである。

そして類は友を呼んだ。クルド人ヘイトの中心人物で埼玉県戸田市議の河合悠祐氏はユーチューブで宮部氏と対談した。最終日、公認団体の代表、浜田聡氏は「NHKから国民を守る党」の前参院議員にしてクルド人ヘイトを繰り返すレイシスト。神奈川にとどまらず埼玉や東京などで差別扇動を重ねる海老名市在住の差別主義者、渡辺賢一氏も応援に駆け付け、笑顔のツーショット写真を交流サイト(SNS)に投稿した。

「期日前投票で宮部さんに投票してきました」「宮部氏に投票済み」

X(旧ツイッター)では参政権のないマイノリティーを二重に痛めつける攻撃的な投稿が相次ぐ。ネット空間の退廃は、参院選を境にして顕在化してきた「日本人ファースト」に代表されるような政治主導の差別・排外主義と地続きなのだ。

■責任

最終日、川崎駅前に関口さんが再び立つ。

演説は研ぎ澄まされた。

「世の中と川崎を掃除するために立候補しました。発達障害万歳！ 精神障害万歳！ 知的障害万歳！ 身体障害万歳！ 朝鮮人万歳！ 中国人万歳！ ジェンダー平等社会を実現しよう、多様な人々が幸せに生きることができる社会を実現しよう！」

関口さんは「いろいろ虐げられている中で『万歳バージョン』は自分でも元気が出るんです」と笑った。

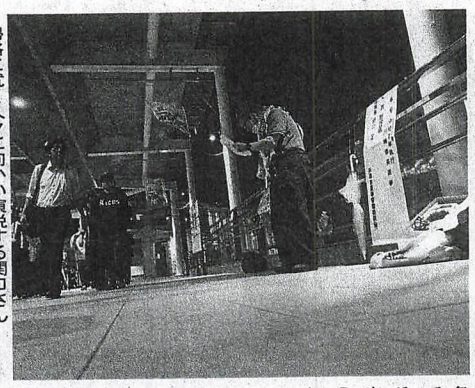
スケジュールをホームページでチェックして演説を聞きに来た横浜市民の横田拓也さん(42)は同じ清掃員だと言った。

「マイノリティーが生きやすいよう、社会の制度を整えていくのが政治家の本分。そういう気持ちを持った人が政治家になるべきだ。私のまわりにも生きづらさを抱えている人はさまざまにいる。政治に関心のない人からしたら左に偏った意見に聞こえるかもしれないが、関口さんのような意見が届き、広がる社会の方が健全だ」

現行の選挙ではレイシストに反対票を投じることはできない。だが、差別をなくす候補者に投じることで差別に反対の意思を示すことはできる。レイシスト以外の票が増えればそれだけ「ヘイト票」の割合は低くなる。私たちのまちに差別者たちの居場所はないのだと突き付ける1票になる。

その権利と責任はあなたの手の中にある。それはまた、差別する側のマジョリティーにあって、差別される側のマイノリティーにはないものである。では誰のため、何のために行使されるべきなのか。かの叫びが私の中でリフレインしている。

「最後は人間の良心が勝つ。最後は人間の良心が勝つ。腐った世の中を掃除しよう」



帰路に就く人々に向かい演説する関口さん＝16日、登戸駅前

おことわり 川崎市長選に立候補している宮部龍彦氏については、経歴や出馬に当たっての主張に著しい差別的言動があり、差別が拡散する恐れがあるため、異なる扱いとしております。